

## オムロン京都太陽株式会社

北京大学 董旭超 李林

### 企業概要紹介

オムロン京都太陽株式会社は、オムロン株式会社と社会福祉法人太陽の家が共同出資して設立した会社である。企業と福祉の橋渡しの役割を担う同社は、身体障害者（以下、「身障者」という）への雇用機会の提供および雇用の安定と社会福祉の確保に努め、身障者が自分で働くことを通して生きがいを感じられるような企業環境を醸成することを目的にしている。

「企業は社会に貢献するための存在である」というのが、オムロンの企業理念である。

1971年、社会福祉法人太陽の家の創立者である中村裕氏は、身障者に働く場を提供してくれるように企業にお願いして回ったが、応じてくれるところは皆無だった。そうした中、オムロンの創業者である立石一真氏が、中村氏と多くの身障者のために福音をもたらした。当時、日本経済は「ドルショック」による深刻な不況の真っ只中であつたが、立石氏は身障者に社会復帰の場を提供したいという一心で専用の工場を立ち上げた。翌年の1972年、世界初の身障者に雇用の機会を与える企業としてオムロン太陽電機株式会社が設立された。それが即ちオムロン京都太陽株式会社の前身である。

### 写真1 オムロン京都太陽の作業場

### オムロンの企業文化

#### 1. 人間にやさしい管理モデル

オムロン京都太陽では、社員の主体が身障者となっているため、人間にやさしい運営モデルが必要不可欠であることは言うまでもないが、それがまた同社の明確な企業文化の特徴にもなっている。

業務運営においては、同社は「自動化技術の細やかさをもって身体の障害を補う」という運営モデルを導入するとともに、社会福祉法人の本旨である「たとえ身体に障害があっても、その就労能力には関係ない」ことを徹底させることで、身障者の雇用を確保し、人間にやさしい作業環境の構築に取り組んできた。例えば、機械の設計という一例をとってみても、賞賛に値するところがある。機械が身障者の制御できる範囲内に設置されているのみならず、障害が左手にあるのか、それとも右手にあるかによって、それぞれ機械の位置が微調整できるようになっているのだ。同社は市場で調達した機械は、必ず身障者が使いやすいように改造するということだが、これは中々真似のできることはないと思った。

生活面においても人間にやさしい管理理念が貫かれている。具体的には、まず食堂の管理が挙げられる。身障者の生活をバックアップするため、同社の食堂は朝・昼・晩の三食を提供しているが、従業員の健康に配慮して、一日の摂取カロリーを2400kcal以内にコントロールしている。次に自動販売機の改造が挙げられる。一般の自動販売機は健常者を念頭に作られているため、身障者の手が届かない場合が多い。この状況を改善すべく、工場内に設置される自販機をすべて設計し直し、身障者でも簡単に使えるようにしている。ま

た、エレベーターもユニバーサルデザインによって車椅子の出入りが便利になっているところを見たときには感激した。

## 2. コストの削減

日本の製造業がどんどん海外移転を始める中、従業員のほとんどが身障者であることを鑑みると、オムロン京都太陽にとって生産コストの削減が喫緊の問題になっていることが分かる。

それに対する取り組みの第一歩として、見学中に目にした日常的な節約が挙げられる。工場の中の蛍光灯一つひとつにスイッチ紐がついており、必要のないときに蛍光灯をこまめに消して電力を節約していた。その後、同じような取り組みを他社でも目にしたが、太陽の作業場が最初だったということもあり、特に印象的だった。

第二に、同社はコストを抑えるために自動化技術を多用し、作業の効率化に努めている。生産過程における技術と管理手法はすべて従業員が独自に開発したものであり、そこには身障者たちの価値観が反映されている。

第三に、製品の付加価値によってコスト圧力を相殺するという取り組みがある。例えば、同社の看板製品でもあるコンセントには一定の付加価値が認められる。

## 3. 身障者の知恵を活用する

見学では、ほとんどの従業員が日々単調なライン作業を繰り返しているように見えたが、工場には彼らの知恵によるたくさんの工夫がなされていた。初代工場長がなんとラインで働く身障者であったことは注目に値する。

工場の2階に部屋が一つ設けられ、そこでは6名の従業員が技術開発に取り組んでいたが、そのうちの4名が身障者だった。このことから分かるように、知的レベルにおいて身障者は健常者にまったくひけをとらない存在なのだ。

また前述したように、工場の管理体制改革と技術革新の多くが、身障者によって行われている。例えばアクセスというソフトを使って管理プログラムを開発したり、赤いサプライラックを独自に開発したりしている。最後に業績優秀なデザイナー2名の紹介があった。

写真2：北村社長と筆者の記念写真

## オムロン精神

オムロン京都太陽は「企業は社会に貢献するための存在である」という理念のもと、「障害があっても諦めることなく、自動化技術の細やかさをもって身体の障害を補い、健全な機能を十分に発揮させていく」という原則を徹底させ、企業文化を支えに、世界のユーザーに満足のいく製品を提供している。

日本の『身体障害者雇用促進法』の規定によると、民間企業における身障者の雇用割合は1.5%で、公的企業の場合は1.9%、国・地方の政府機関と公的機関の場合は2%となっている。統計によると、日本企業における身障者の平均就業率は1.52%で、法的基準値をやや上回っているという状況だが、オムロン京都太陽の従業員総数に占める身障者の割合は2.5%超になっている。同社は高い品質と社会福祉を同じように重んじる企業精神に基づき、科学技術をもって身体の障害を補うことに心血を注いでいる。同社は「人に魚を与えればその日の糧にはなるが、魚の釣り方を教えれば一生の糧になる」こと、一人ひとりが意欲をもって働き、自立して生活することこそが大事だという信念をもって日々の業務に励んでいる。

今まさに経済の高度成長期にある中国の社会と企業は、オムロン京都太陽のこうした企業精神を見習うべきだと思う。